

## 谷文晁筆「東海道勝景」(永青文庫蔵)の制作について

中村 真菜美 大阪大学

谷文晁筆「東海道勝景」(永青文庫蔵)は東海道沿いの景色を描いた全一卷、二十図からなる画卷で、『御参勤江戸御持遣』(永青文庫蔵)などから熊本藩第八代藩主・細川斉茲(1755-1835)の注文で、文化5年(1808)までに制作されたことが判明している。本画卷は熊本藩所蔵の近世絵画に関する研究では重視されてきたが、文晁の風景表現を論じた諸研究ではあまり注目されてこなかった。しかし、その作風は文晁の画風転換期にあたる享和・文化期のものを示す可能性が高く、文晁の風景表現の変遷を検討する上で重要な位置を占めると考えられる。また近年、江戸後期の風景及び代替品である絵画を愛好する風潮「山水癖」の実態が様々な作例をもとに実証されてきたが、発表者は本画卷の検討から、なぜ諸大名が風景に熱中し、如何に文晁がその風潮に関与したのかという問題にも言及したい。

本発表ではまず「東海道勝景」の表現上の特質を明らかにすることを目指し、寛政期の代表作「公余探勝図」(寛政5年、東京国立博物館蔵)から構図を引き継ぎながらも、線質や色彩が先行研究で指摘される文晁の画風転換期の特徴を顕著に示すことを確認する。画中のモチーフには風俗描写の多様化および「道」を描くことへの意識の減退が看取でき、風景を描くにあたって文晁の創作意識に変容があったと考える。また、淡彩を基調とし、かつ金泥の多用によって輪郭線が曖昧になるほど明るい画面、柔らかく素地に溶け込むような線質、西洋由来の遠近法に依拠した空間表現などには、特に原在正筆「富士山図巻」(寛政8年頃、個人蔵)をはじめとする京都画壇における実景描写との類似が指摘できる。寛政8年(1796)以降、たびたび上京した文晁が現地の画人と密接に交流した事実も踏まえることで、古絵巻学習に画風転換の要因を求める先学の見解に加え、東西画壇の同時代的交流という観点からも文晁の新しい画風形成について再検討を試みたい。

次に「東海道勝景」の制作目的を検討する。「琵琶湖写生図巻」(ボストン美術館蔵)や「東海道紀行巻」(所在不明)等の風景写生を取り上げて「東海道勝景」の作画過程を考察し、現地取材に赴くことが文晁の風景を題材とした作品の価値および需要に寄与した可能性を提示する。そして諸大名による領内巡覧および巡覧記執筆といった同時代の動向や熊本藩の御用絵師による「領内名勝図巻」(寛政五年、永青文庫蔵)の制作経緯から、「東海道勝景」は大名間の交流での風景趣味の共有のために制作され、文晁はその文化圏で大きな役割を果たしたと指摘する。また注文主である斉茲が肥後細川家歴代の嗜好を踏襲して文化への造詣を深めた背景に、家督相続をめぐる事情があることを推察し、「東海道勝景」にも熊本藩の名宝や庭園の存在を彷彿させる役割が求められたと結論づける。

(なかむら・まなみ)